なれぬ航海のため、船よいに苦しみながら下北地方の野辺地港に着いたのは、一ヵ月後の六月なかば過ぎ、五郎が十二歳のときです。野辺地は、移住してくる旧会津藩士と、その家族たちを迎える港であり、さらにこの人たちをその先の目的地に出発させるまでの仮の場所でもあって、大変人の出入りがはげしい所でした。

父佐多蔵は、七月末ごろ、会津若松から野辺地へやってきました。しかし、五郎や太一郎兄が、いくら会津のことを聞いても、ろくろく返事もしなくなり、付近の川辺に釣糸をたれて、もの思いにふける日が続きました。

兄太一郎は、この地に永住する覚悟をきめて、同じ会津藩士の娘すみ子を嫁にもらいました。

九月になって、柴一家は安住の地を求めて野辺地から田名部に移り、ここで開拓にはげむことになりました。しかし、ここで不幸な出来事が、またまた柴